

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Exhaustive answer to old problem

オーストラリア

古くからの問題に対する解答



古くから問題になってきた農業による排気ガス量。この総排出量を劇的に削減できるようになると話すのは、農機からの排気ガスを土壌に注入することによって成功した技術開発者らだ。

タンザニア人の農家ミック・デニス氏（以前はビクトリア州西部バリー・ジュッラに在住）によれば、バイオ・アグティブシステムは、小型コンデンサを使って排気ガスを集めて、それを安全に土壌の中へ戻す仕組みになっている。

デニス氏は最近、海外で同システムを販売しているカナダ人のギャリー・ルイス氏（写真）とバイオ・アグティブ社（オーストラリア）のブラッド・モドラ氏とともに、トウモロコシや大麦、牧草の圃場で同システムの試験を行なった。ルイス氏が属するN/Cクエスト社はすでにバイオ・アグティブのライセンス許諾を持っており、このシステムは世界各地で良い結果をもたらしていると話す。さらに、「タンザニアからカザフスタンまで、英国からカナダまでの広範囲で使用されており、オーストラリアや北米で稼働している主要な作業機と同様に小型トラクタに接続するのは容易だ」と付け加える。最近アフリカで同技術を用いたところ、生産性が向上したと言われているが、オーストラリアにおけるメリットについては、連邦政府による炭素税が導入される今年後半にはつきりする見込みだ。

同システムを作動すると、播種機のタイヤが土の中を移動する際に発生するトラクタのエンジンによる排気ガスが土壌に注入され、土の中にある空気層を酸化有機物で満たす。土中の炭素濃度が上昇すると複雑な生化学的作用が生じて、植物の化成肥料への依存度を減少させることができるという。ルイス氏は説明する。

モドラ氏は、国内の農家へのバイオ・アグティブシステムの普及を期待している。価格はコンデンサと関連システムを合わせて約6万豪ドル（約480万円）。



排気ガスを土壌に注入することによって植物の化成肥料に対する依存度を間接的に減少させることができると話すギャリー・ルイス氏。

Lemken sets up shop in South Africa

南アフリカ

レムケン社が南アフリカに進出



2011年のアグリテクニカで、レムケン社は南アフリカに子会社を設立する意向を発表した。これが今、南アフリカ（株）の創立により現実のものになるうとしている。同国出身のカレル・ムニック氏がマネージャーに就く。

ムニック氏は南ア・パーワルド社でクラス部門マネージャーを務めた後、1年間のシベリア滞在より帰国したばかりだ。シベリアではチャレンジャーのトラクタを専門に販売する新規ビジネスを立ち上げた。その中でレムケン社の製品を扱い、同社よりアフリカ南部における事業立ち上げの誘いを受けたのである。

レムケン製品は長年、南アフリカにも輸入されてきたが、この輸入業者はウエスタン・ケープを拠点とし、地元を中心に小規模に販売してきた。将来に目を向けたレムケン社は、自社の事業を立ち上げ、十分な資金を提供してアフリカ市場を全面的に支援すれば、市場シェアを大きく拡大できると見込んだのだ。

最近、フリーステートのフランクフォートで実演が行なわれた。当初、同地の農業法人であるセントラルウエス社の従業員向けだったが、後に現地の一般農家も駆けつけた。同社は101年前に農業協同組合として設立され、以来地域のリーダー的役割を果たしてきた。97年、多くの農業協同組合と同じく、同組合も上場した。現在はフリーステート、ノースウエスト、ノーザン・ケープ、ハウテンの各州で事業展開している。

南アフリカではこれまでにムブラランガ州のアグリ社販売店の実演で良い成果を上げている。かつて農業協同組合だった同店はディーラーとしてレムケン製品を取り扱うこととなり、すでに機械を予約している。さらにザンビアのアフリカ社の関連企業からも多くの関心が寄せられているという。

今回の実演に登場したのは、作業幅6mでいずれも折りたたみ式のカラット9（セミマウント式のスタブルカルチ）とルビー（セミマウント式のコンパクトディスクハロー）。さらに、ジルコン8（パワーハロー）の実演も行なわれた。



レムケン社のカラット9（コンパクトディスクハロー）の品定めをする取引先関係者たち。



Muck-Truck saves sweat

米国

マック・トラックで重労働が緩和



荷物をいっぱい積んだ手押し二輪車をめぐるみで操縦するのは不可能に近い。それは言い過ぎかもしれないが、馬主であるクリスティーナ・デーリ氏はもっと良い方法があるはずだと考えた。

二輪の手押し車を購入した直後、デーリ氏は南メリーランド、チエスピーク湾で開催されたワールド・エクスポでマック・トラックに出会った。間もなく、彼女は買ったばかりの二輪車をこれに買い替えた。この160ccのホンダエンジンを搭載した動力手押し車のおかげで、デーリ氏はさまざまな荷物を積んで坂を上り下りできるようになった。何と言っても、ぬかるみや肥やしの中では重宝する。

さらに、マック・トラックは便利なおと冬季の間は、雪かきアタッチメントを前方に取り付けて使用することもできる。英国のニッチ・プロダクト・セールス社が製作し、約20年前にホンダが初の動力手押し車として販売した。それ以来マック・トラックは進化を続け、今では4大陸で販売されるまでになった。米国に登場したのは2004年。業務用のホンダGXV160cc、4サイクル、5.5馬力エンジンと、テコムセ・ピアレスの前進3速・後進1速のトランスアスクルを搭載している。積載量は0.17m³で、約250kgの荷物を運ぶことができるが、幅が700mm以下で畜舎の出入りも容易だ。「たった今、このマック・トラックで250kgの石を動かしたの。大仕事がとても簡単になったわ」とデーリ氏は話す。



今は乾燥してほこりっぽいですが、地面がぬかるんだ状態でこそマック・トラックは本領を発揮する。

Tough 'tele' for the Fendt back-end

オランダ

フェントの後部には頑丈な伸縮性ブームを



中古のマトロプロ社製テレハンドラから伸縮性ブーム部を取り外して、トラクタの三点リンクヒッチの上に溶接する。それがロナルド・ボス氏のリアマウントローダーに施した作業のすべてだ。

オランダ北部フリースラント州ホルンステルズワグで、ボス氏は2人体制の効率的なコントラクタ経営を目指している。そういう訳で、彼が所有するトラクタは2台のみ。双方ともフェント社のパリオ900シリーズだ。そのうちの1台、パリオ936型にはオプションの後進機能が備わっている。そこで、便利な機能を活用しようとするボス氏は従来のフロントローダーを購入する代わりに、自分の手でリアローダーに改良を加えることにしたのだ。

サイレージやわらを扱う季節になると、ボス氏は大きなベールを作ったり運搬したりする作業に大半の時間を割く。運搬作業では、936型トラクタが後方に大型の二軸トレーラを引く。圃場に到着すると、トレーラを外してシートの向きを180度回転させれば、積み込み作業の準備が完了する。

リアローダー付のフェントトラクタを用いるのは、快適であるというだけでなく、多くの利点があるからだ。ボス氏は感じている。何と言っても、トレルボルグ製の幅広リアアタイヤ(TM900)のけん引力は素晴らしい。その上で土壌構造へのダメージを最小限に抑える効果もある。

「ボスローダー」の最高持ち上げ高さは5mだが、トラクタ運転席からの視界を良好に保つため、オペレータは4m以下で作業することが多い。



ベールの積み込みは素早く快適だ。ものの数秒で高速運搬車から後進ローダーへと姿を変えるボス氏のフェントトラクタ。